

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870077

研究課題名(和文) 日本語における漢字・漢文訓読を媒介とした意味借用とその言語接触論的位置づけ

研究課題名(英文) Semantic Borrowing through Chinese Characters and Vernacular Reading in Japanese from a Language Contact Perspective

研究代表者

ジスク マシュー・ヨセフ (Zisk, Matthew Joseph)

山形大学・理工学研究科・助教

研究者番号：70631761

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本語における漢字・漢文を媒介とした中国語からの意味借用の起こり方と要因を明らかにした上で、その周辺現象をも見ていき、日本語における漢字・漢文訓読を媒介とした言語借用モデルを構築した。その結果、日本語には意味借用の他、形態統語レベルでの中国語からの借用形式も多く、これらの形式は定訓という社会的に定まった漢字の読み方と漢文訓読という漢文の逐語的翻訳システムに起因するものだと明らかにした。この他、上記の調査を円滑に行うために、学生アルバイトを雇用し、現在電子化が比較的進んでいない中世の漢字仮名交じり文資料17点(約173万字)を電子化し、近日インターネット上で公開する予定である。

研究成果の概要(英文)：In this research, I investigated the causes and effects of semantic borrowing as well as other forms of linguistic borrowing through kanji and the vernacular reading of Chinese texts (kanbun) in Japanese. I found that in addition to semantic loans, a large number of calques, both lexical and morphosyntactic, from Chinese are observed in Japanese and these loans are a direct result of two sociolinguistic phenomena unique to Japan: teikun (prescribed readings of kanji) and kanbun kundoku (vernacular reading of kanbun or 'text transposition').

In order to survey the spread of such borrowed forms to native literature, it was necessary to survey a large number of pre-modern, especially Late Middle Japanese (LMJ), texts. Thus, another crucial part of this project consisted of digitalizing such texts. In total, my team and I digitalized 17 LMJ kanji-kana mixed script texts totaling approximately 1,730,000 characters and plan to release the database on the world wide web in the near future.

研究分野：日本語学

キーワード：意味借用 言語借用 言語接触 日本語史 漢文訓読 定訓 中世漢字仮名交じり文データベース

1. 研究開始当初の背景

日本は古代より中国と盛んに交流していく中で、言語の面において中国語から多大な影響を受けてきた。これまでの日本語史研究では中国語からの借用語である漢語が比較的多く取り上げられてきたものの、日本語固有の語彙である和語における漢字の影響を取り上げた研究は少ない。漢文訓読において、漢字・漢語を直訳した言語形式が多いことは山田孝雄(1935)、大坪併治(1981)によって夙に指摘されている。また、漢文訓読を通して、和語が漢字から本来有しなかった意味用法を取り入れることがあることは佐藤(1987)が指摘している。しかし、近年までは、このような直訳形式や意味借用についての徹底的な研究がなかった。ジスク(2013)は多くの例を示しながら、漢字・漢文を媒介とした意味借用という現象を詳しく取り上げたが、言語接触論においてこのような意味借用がいかなる意義を持つかについての考察までは至らなかった。そこで、本研究は漢字・漢文を媒介とした意味借用の例をさらに見ていくと同時に借用義以外の借用形式をも視野に入れ、その借用要因について考えることで、言語接触論における漢字・漢文を媒介とした意味借用の位置づけを示す。

2. 研究の目的

本研究は和語が漢字から本来有しなかった意味を取り入れる現象である意味借用とその周辺現象を取り上げたものである。研究目的は大きく、次の四つに分けられる。

(1) 漢字・漢文を媒介とした意味借用はどのような状況で起こり、どのような意味領域において起こりやすいかを明らかにする。

(2) 意味借用の他にどのような借用形式が見られるかを明らかにし、これらの形式を体系化した借用モデルを構築する。

(3) 日本語に見られる意味借用と外国語に見られる意味借用の要因を比較することで、言語接触論における漢字・漢文を媒介とした意味借用の位置づけを示す。

(4) 本研究に必要な調査を行うために、現在比較的電子化が進んでいない中世の漢字仮名交じり文資料を対象としたデータベース(「中世漢字仮名交じり文データベース」)を構築する。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために、以下の手順に従って研究を行った。

(1) <借用義の具体例調査>

ある意味が借用されたものか日本語内で自然に生じたものかを判断するためには文献資料におけるその使用傾向を見ていく必

要がある。本研究では対象となる語の本来の意味用法を知るためにまず漢字の影響が比較的少ないと思われる『万葉集』や平安時代の仮名文学作品におけるその意味用法を調べた。その後、訓点資料における対象語の例を探し、本来の意味用法と比較した。和文資料と訓点資料との間で意味的差異が確認できる際には対象語の被訓字の用法を漢籍・仏典で調査し、漢文訓読に見られる意味拡張が被訓字に由来するものなのかどうかを考察した。被訓字に由来するものと判明した際には意味借用の例と見なした。借用された意味が漢文訓読の段階でとどまったものなのか、日本語の一般の文章まで広がったものなのかを知るために、和漢混淆文を中心とした中世・近世の文献資料における対象語の使用を見ていき、借用された意味がどこまで普及したかを調査した。中世の文献資料調査には刊行索引や既存のデータベースに加え、本研究で作成した「中世漢字仮名交じり文データベース」も利用した。具体例がある程度集まった段階で、意味借用の起こる要因と起こりやすい意味領域について検討した。

(2) <日本語における漢字・漢文を媒介とした言語借用モデルの構築>

日本語における漢字・漢文を媒介とした言語借用形式は借用義の他に多様なものがあるが、現在の段階(研究期間開始時)ではこれらの借用形式を体系化した研究は見られない。本研究では先行研究と訓点資料の調査を基に、できるだけ多くの借用形式の例を集め、それぞれの形式の借用要因と借用されやすい意味領域について検討した上で、日本語における漢字・漢文を媒介とした言語借用モデルを構築する。

(3) <日本語と外国語で見られる意味借用の比較>

意味借用は日本語に限った現象ではなく、接触するどの言語の間にでも起こり得る。本研究では特に言語借用研究が進んでいる印欧諸語における意味借用の実態を調べ、日本語で見られる漢字・漢文を媒介とした意味借用との類似点・相違点について考えた。印欧諸語の調査は時間の関係で主に先行研究の成果に拠るが、一部原資料を調査することもあった。

(4) <中世漢字仮名交じり文データベースの構築>

中世の漢字仮名交じり文は、漢文訓読の影響が濃いことから、意味借用やその他の借用形式の漢文訓読から一般の文章への普及過程を示す重要な資料となる。しかし、現状ではほとんど資料が電子化されていないため、調査には非常に時間がかかる。本研究で漢文訓読の影響が特に大きい中世の仏教説話集と抄物を中心に文献資料の電子テキスト化を進めた。電子化の方法としては活字で刊行

された資料の翻刻をスキャナーで読み取り、スキャンした画像に文字認識 (OCR) をかけた。OCR の認識ミスや、ページ番号、訓点、外字等の情報入力のために、山形大学工学部から学生アルバイトを計 15 名 (年間 4~5 名) 雇用し、3 年間で約 1,100 時間の校正作業を依頼した。

4. 研究成果

本研究は開始当初、意味借用を中心に取り上げるものであったが、一年目の後半から分析的が借用形式全般の体系化と、漢字・漢文を媒介とした言語借用の要因に推移した。このように方針を変えたのは、研究期間以前からすでに借用義の例を多く集めており、言語接触論において漢字・漢文を媒介とした意味借用はいかなる意義を持つかを明らかにするためには借用義以外の借用形式にも注目し、その借用要因を探る必要があると判断したためである。

以上のような事情から、本研究では具体例調査を「まなぶ」と「まねぶ」の 2 語に限った。「まなぶ」と「まねぶ」は *mana (被覆形) ~ mane (露出形) という名詞から派生した同根語だと考えられるが、平安時代に至っては両者に厳密な使い分けが見られる。すなわち、「まなぶ」は学習する義、「まねぶ」は模倣する義で使われ、混合した例はほとんど見られない。一方、訓点資料に目を向けると、「学」字の訓として「まなぶ」も「まねぶ」も学習・模倣の両方の義に用いられている。「学」字には学習・模倣の両方の意味があるが、「まなぶ」「まねぶ」は漢文訓読において「学」字の訓として定着することでその影響を受け、混同されるようになったと考えられる。中世以降、訓点資料では模倣の義に用いた「まなぶ」の例が増え、中世以降の漢字仮名混じり文にもこの用法が多く見られる。この成果は第 111 回訓点語学会 (学会発表③) で発表した。

本研究期間以前に、書記行為を表す動詞「うつす」「あはす」「のる」「のす」と、啓蒙を表す動詞「あかす」「あきらむ」を取り上げたが、「まなぶ」「まねぶ」は言ってみれば学習を表す動詞であると言える。書記行為と啓蒙はいずれも中国から入ってきた新文化概念に当たるものとも言えるが、学習も多少は中国との接触以前にあったものとしても、中国との交流でさらに盛んになったものとも言える。したがって、「まなぶ」「まねぶ」のような学習表現の借用には、書記行為表現・啓蒙表現と同様、文化移入が大きな要因となったと言える。

本研究で上げた最も大きな成果は漢字・漢文を媒介とした言語借用モデルの構築と借用要因の解明である。漢字・漢文媒介借用形式を Betz (1949), Haugen (1950) 等の分類法に基づいて、語と音素そのものを直接取り入れる移入形式 (importation) と外国語の

形式を自国語で再現する模倣形式 (imitation) とに分け、それぞれの形式に借用語、借用義、翻訳借用語等の下位分類を設けた。この借用モデルは 2014 年の日本語学会秋季大会 (学会発表⑦) で発表した後、さらに改訂して論文化している (雑誌論文④)。以下に雑誌論文④で提唱した借用モデルと、各形式の例を示す。なお、各形式の詳細な説明については雑誌論文④を参照。

A. 移入 (importation)

1. 借用語 (loanword) : 学問, 巡礼, 供養, 上手, 門, 絵, 一, 二, 三, 今日, 今晚
2. 借用接辞 (loan affix) : 不..., 非..., 可..., 被..., ...様, ...流, ...派, ...的
3. 借用文体 (loan stylistics) : 漢文体 (正格漢文)
4. 借用音素 (loan phoneme) : 喉内鼻音 (/ŋ/)
5. 借用音素配列 (loan phonotactics) : 音節構造, 語内の音素配列

B. 模倣 (imitation)

1. 借用義 (loan meaning) : 遊→あそぶ (遊学), 写→うつす (書写)
2. 翻訳借用語 (loan translation) : 小春→こはる, 青雲→あをくも, 天地→あめつち
3. 部分的翻訳借用語 (partial loan translation) : 大納言→おほいものまうすつかさ, 大臣→おほまえつぎみ
4. 借用成句 (loan phrase) : 四海→よつのうみ, 開花→はながひらく, 迎春→はるをむかふ
5. 借用統語 (loan syntax) : 語順 (倒置法, 提示語法), 修辞法 (二重否定, 二重受身)
6. 借用転成 (loan derivation) :
conversion : 且→かつ (副詞→接続詞)
morphological derivation : 及→およぶ→および (動詞→接続詞)
7. 字注借用語 (annotational rendering) : 『説文解字』: 「銀, 白金也」→しろがね
8. 字形借用語 (etymological rendering) : 娶 (女+取) →めとる

図 1 : 漢字・漢文を媒介とした借用モデル

図 1 からわかるように、漢字・漢文を媒介とした借用形式には多様なものがあり、特にこれまでにあまり取り上げられてこなかった模倣形式については 8 種類もあり、日本語の歴史的発展に大きな影響を与えている。このような借用モデルを設けた上で、漢字・漢文を媒介とした言語借用の動機について考えた。その結果、移入形式は主に異文化摂取に伴うものであるのに対し、模倣形式は、異文化摂取も一つの動機となるものの、定訓という一つ一つの漢字に指定された読み方 (prescribed reading) と、漢文訓読という原漢文を残しながら、逐語的に自国語に“移

調”していく漢字文化圏特有の翻訳システム (text transposition) に起因することを明らかにした。すなわち、漢文訓読では自然な日本語の文章を作ることより、元の文章をシステムティックに読んで、その意味を正確に表すという点に重心が置かれ、その結果、本来の日本語ではあり得ないような表現が多く生まれたのである。借用要因としての定訓と漢文訓読については2013年の日本歴史言語学会大会(学会発表⑥)と2014年のLinguistic Society of America Annual Conference(学会発表④)で発表した後、雑誌論文④でまとめた。また、2015年12月にフランスのパリ第七大学(ディドロ)に招待講演で呼ばれた際に、漢文訓読と言語借用におけるその関与について発表した。

日本語と印欧諸語における意味借用の比較についてはBetz(1949), Haugen(1950), Gneuss(1955), Toth(1980)等の研究から、ドイツ語や英語で見られる意味借用に二種類があることがわかった。一つは意味的類縁性によるもので、例えば、本来幽霊の義しか持たなかった英語ghostが幽霊と精霊の両方の義を持つラテン語spiritusの影響を受け、精霊の義を取り入れたようなものを言う。もう一つは音声的類縁性によるもので、例えば、本来失礼な発言を表したポルトガル語のgrosseriaが音声的に類似していることから、英語groceryの影響を受けて食品雑貨店の義を取り入れたような例を言う。印欧諸語間で見られる意味借用においては後者の例のほうが圧倒的に多いようであるが、日本語と中国語の場合、印欧諸語と違って系統を異にし、同根の語を持たないため、このような音声的類縁性による意味借用は見られない。日本語で見られる漢字・漢文を媒介とした意味借用はこれまでの研究で挙げられてきた要因で解釈しようと思えば、おそらく意味的類縁性によるものだと言えるだろうが、「載」字の影響を受けて乗り物の中に位置させる義から、紙媒体に記録する義まで拡張した「のす」や、「明」字の影響を受けて夜明けまで何かをして過ごす義から、物事の意味を明らかにする義まで拡張した「あかす」のように意味的類縁性が必ずしも明確でない例も少なくない。「のせる」や「あかす」のような例では意味的類縁性がまったく関わってこないとは言えないが、意味的類縁性より「載」を「のす」、「明」を「あかす」という決まった定訓で統一して訓読しようとしたことが意味借用の最たる要因となったと言っていよう。意味借用の要因としての定訓については学会発表④で詳しく取り上げ、現在論文化を進めている。

「中世漢字仮名交じり文データベース」の構築はJSPS特別研究員奨励費11J07278交付期間中から始めたもので、本研究を始める時点ですでに『雑談集』と『楊鳴曉筆』(中世の文学, 三弥井書店)の電子化を行っていた

が、校正が一回にとどまっていたため、入力ミスが目立つ状態となっていた。このため、研究期間の初年度(2013年度)には『雑談集』『楊鳴曉筆』の電子テキストを再校正し、テキストの信頼性を大きく上げた。初年度の後半から『三国伝記』(上・下, 中世の文学, 三弥井書店)の電子化を始め、2014年度に完成した。2014年度にはこの他、『今物語・隆房集・東斎随筆』『六代勝事記・五代帝国物語』(中世の文学, 三弥井書店), 『源威集』(東洋文庫), 『雑々集』『宝物集—中世古社本三種』『発心集—異本』(古典文庫), 『尊経閣文庫蔵塚記』(和泉書院影印叢刊), 『興福寺本往生要集』(南都仏教25・28)の8冊13作品の電子化を行った。研究の最終年度(2015年度)には『毛詩抄』(4冊, 岩波書店)の電子化を行った。全部で17点の資料、総文字数約173万字規模のデータベースとなった。電子化したテキストは現在検索しやすいように加工しおり、近日ネットで公開する予定である。

<引用文献>

- 大坪併治(1981)『平安時代における訓点語の文法』風間書房
- 佐藤喜代治(1987)「漢字と日本語」佐藤喜代治編『漢字講座3—漢字と日本語』明治書院, 1-24頁
- ジスク マシュー(2013)「日本語における漢字を媒介とした意味借用の研究」東北大学大学院文学研究科・平成24年度博士学位論文
- 山田孝雄(1935)『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』宝文館
- Betz, Werner(1949). *Deutsch und Lateinisch: Die Lehnbildungen der Althochdeutschen Benediktinerregel*. Bonn: H. Bouvier u. Co.
- Gneuss, Helmut(1955). *Lehnbildungen und Lehnbedeutungen im Altenglischen*. Berlin/Bielefeld/München: Erich Schidt Verlag.
- Haugen, Einar(1950). “The Analysis of Linguistic Borrowing.” *Language*. Vol. 26, No. 2. pp. 210-231.
- Toth, Karl(1980). *Der Lehnwortschatz der Althochdeutschen Tatian-Übersetzung*. Epistemata: Reihe Literaturwiss. Vol. 6. Würzburg: Königshausen und Neumann.

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

- ①ジスク マシュー(2016)『『日本語大事典』の項目名を英訳して—その作業過程と諸問題点—』『日本近代語研究』第6巻, ひつじ書房(査読有り)(掲載決定)

- ② ジスク マシユ (2016) 「用例を集める」大木一夫編『ガイドブック日本語史調査法』第10章, ひつじ書房 (査読無し) (掲載決定)
- ③ ジスク マシユ (2016) 「電子テキストを利用する」大木一夫編『ガイドブック日本語史調査法』第11章, ひつじ書房 (査読無し) (掲載決定)
- ④ ジスク マシユ (2015) 「漢字・漢文を媒介とした言語借用形式の分類と借用要因」斎藤倫明・石井正彦編『日本語語彙へのアプローチ』おうふう, pp. 197-213 (総ページ数: 313) (査読無し)

[学会発表] (計8件)

- ① Zisk, Matthew (2015. 12. 12). “Kanbun Kundoku (Vernacular Reading of Chinese Texts) and Linguistic Borrowing.” Paper presented at Séance Scientifique, Samedi 12 Decembre 2015: From Punctuation to Morphosyntactic Glosses: East and West, Past and Present, Université Paris Diderot, Paris, France. (招待講演)
- ② Zisk, Matthew (2015. 6. 27). “Translating *An Encyclopedia of Japanese Language and Linguistics*.” Paper presented at the International Association of Japanese Studies 292nd Meeting, Nanbu Community Center, Yamagata City. (招待講演)
- ③ ジスク マシユ (2014. 11. 2) 「和語「まなぶ」・「まねぶ」の意味変化過程における「学」字の影響」第111回訓点語学会研究発表会, 於東京大学
- ④ Zisk, Matthew (2014. 1. 3). “Motives for Semantic Borrowing and Calquing from Old Chinese into Japanese.” Paper presented at the Linguistic Society of America 2014 Annual Conference, Minneapolis, Minnesota, U. S.
- ⑤ Zisk, Matthew (2013. 12. 21). “What is Borrowable?: A Look at Borrowing Typology in Japanese.” Paper presented at the International Association of Japanese Studies 278th Meeting, Nanbu Community Center, Yamagata City. (招待講演)
- ⑥ ジスク マシユ (2013. 12. 01) 「言語借用における漢文訓読と定訓の位置づけ」日本歴史言語学会 2013年大会, 於東北大学
- ⑦ ジスク マシユ (2013. 10. 27) 「日本語における漢字・漢文を媒介とした言語借用モデルの構築」日本語学会 2013年秋季大会, 於静岡大学 (『日本語学会 2013年度秋季大会予稿集』所収, pp. 207-212)

[図書] (計1件)

- ① 佐藤武義, 前田富祺 (編集代表), 工藤真由美, 坂梨隆三, 迫野虔徳, 杉戸清樹, 早田輝洋, 飛田良文, 村上雅孝, 山梨正明,

湯澤質幸, 吉田和彦, 小林隆 (幹事), ジスク マシユ (欧文翻訳監修) 編 (2014) 『日本語大事典』朝倉書店 (総ページ数: 2, 456)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

- ① <http://yamagata-u.academia.edu/MatthewZisk>
- ② <http://www2.yz.yamagata-u.ac.jp/research/seeds/pdf2014/zisk2014.pdf>
- ③ http://www2.yz.yamagata-u.ac.jp/research/seeds/pdf22_e/11_4zisk.pdf
- ④ <http://www.glossing.org>
- ⑤ <http://journals.linguisticsociety.org/proceedings/index.php/ExtendedAbs/article/viewFile/2404/2182>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ジスク マシユ ヨセフ
(ZISK, Matthew Joseph)

山形大学・大学院理工学研究科・助教
研究者番号: 70631761

(2) 研究分担者

なし

研究者番号:

(3) 連携研究者

なし

研究者番号: